

天 花

TENGE

山口県立美術館ニュース

第74号

平成 10 年 8 月 1 日
発行山口県立美術館



香月泰男 「朝陽」

表紙作品解説

香月泰男

1911(明治44)年～1974(昭和49)年

朝陽

1965(昭和40)年

油彩・カンヴァス 90.9×60.6cm

1965年個展(銀座・フォルム画廊)ほか

シベリア・シリーズには太陽をモチーフにした、あるいはそのイメージを借りた作品がいくつもある。それを制作年順に列挙すれば、『黒い太陽』『朝陽』『雨』『青の太陽』『日の出』となり、それらが絵の具箱に記された十二の文字のうちの一つ「陽」に関連する作品であることは容易に想像されよう。

「太陽が一番美しく見えるのは、朝である。…『抑留中の耐寒訓練で』寒さと疲労でぶっ倒れそうになり、ふと見上げると、それを忘れるほど太陽は美しく燃えていた。」(『私のシベリヤ』)

しかし画家もいうように、それはいつも崇高で美しいばかりの太陽ではない。

「…敗色日に濃く、緊張感を増すにつれ、太陽は自ら希望の象徴であることをやめたかのように、その赫光をさえ失って中天に暗黒に見えもしよう。」(『黒い太陽』の自筆解説文)

画家はこの作品が「家に送るハガキにそえて描いてやった絵をもとにして描いたもの」(『私のシベリヤ』)とも述べているので、ハイラルでの体験とシベリアでの記憶とがここでは一体のものとなっていると考えられる。と同時に、それが先に触れた絵の具箱の「陽」のもともとのイメージだったかという点、太陽のモチーフが繰り返されながら微妙に異なっていることから、厳密にはどれもそのままではありえないのではないかと推定されよう。つまり、シベリア・シリーズはこの十二文字をストレートに絵画化したものではないだろう、ということである。

よくいわれるように、シベリアの体験が独特の様式を獲得することによって

次々と吐き出されるまでにほぼ十年の月日を要している。一九五〇年代の終わりにから求龍堂版の画集『シベリヤ』の刊行(一九六七)までを一つのまとまりと考えても、十二文字の全部が展開されているわけではなく、また現在はその第一作とされる『雨へ牛』が、後でシリーズにつけ加えられるという経緯もあった。換言すれば、十二文字がもともと持っていたイメージと、この時点でまとまりを見せたいいわゆるシリーズ作品は、必ずしも一対一の対応をしているのではなく、それはむしろ当然の変遷といえるだろう。『北へ西へ』(一九五九)や『避難民』(一九六〇)といった体験を比較的直接的に語る作品が続いた後に『黒い太陽』(一九六二)が制作され、そして再び『朝陽』(一九六五)というかたちで太陽のモチーフが繰り返されたことは、物語性に傾き過ぎるシリーズの流れに楔を打ち、同時に「自分が兵であることも忘れて」見入ってしまった感動をこそ留めるという基本的な姿勢の確認のようである。

シリーズ全般においては確かに画家の体験は、耐寒訓練や敗戦、抑留体験に基づいている。しかし絵画は、体験や出来事の説明には不向きであり、そこにはおのずと限界がある。香月が「私の」という限定的な言葉にこだわるざるをえなかったのもこのことによるものだろうし、他のいわゆる戦争画のほとんどが不成功に終わっている理由も同様だろう。したがって目にした事実をそのまま再現するのはなしに、ある表現方法の形式的な側面と対象の在りようとの接点に、簡単に言ってしまう絵画としての戦争体験の

具体化に自然のモチーフの導入が欠かせなかったことが、このシリーズの特徴といえるのではないだろうか。

いく筋かの層のように横たわるのは大地や空気だろう。だが、それはシベリアのどこかを特定するものではない。とすれば、画家の説明をとりあえず横に置いておくこととして、その時に見えてくるのは、独特な画面処理と抽象的なまでに様式化された空間である。いわゆる三次元的な表現に慣れた目にはそれがどこにあるのかさえ判然としないにもかかわらず、むしろその抑制された構図が、磨りガラスを通して見た実際の太陽のように、平面的でありながらゆったりとした運動を感じさせるものとなっていて、そのことに私たちは魅きつけられはしないだろうか。もちろんそれはこのように太陽が描かれたことの効果であって、理詰めで太陽とはこういうものであるというような提示の仕方によるのではない。その意味では叙情的に対象との距離が図られているに過ぎないともいえるかも知れないが、その感情の超越性は、赤と黒とのほとんど二色ともいえるコントラストによって強調されていて、誘導的であるだろう。これが太陽だというのは、一つの約束事に近い。であれば、むしろ得体の知れないものもつ不気味なエネルギーこそ、戦争を含む人間の出来事の対極にあつて、それを相対化する役割を担うものである。つまり、中空に描きだされたイメージが太陽のようなのだと直感されたとき、私たちはただならぬ光のもとに放り込まれるのである。

PISSARRO

Cammille Pissarro and The Pissarro Family

ピサロ展

印象派の巨匠とピサロ家の画家たち

カミーユ・ピサロは一八三〇年、当時デ・ンマーク領だった西インド諸島のセント・トマス島に生まれた。両親は裕福な商人であったようである。一八四一年、十一歳になったピサロは、パリ郊外にある寄宿学校に入学し、ここで一八四七年まで学ぶ。寄宿学校の校長がピサロに素描の手ほどきをしている。

セント・トマス島にもどった彼は、家業を手伝いながら素描を描きつづける。しかし、関心のもてない商売上の雑務は、画家をめざそうとする彼の内なる欲求と折り合うはずもなかった。一八五二年、突然ピサロは家に書き置きを残したまま、四歳年上のデンマークの画家フリッツ・メルビーとともにベネズエラに渡ってしまった。こうした「事件」があつてから、ピサロの両親もついに息子が画家の道に進む以外には選択の余地がないことを悟り、一八五五年、パリに出て絵を学ぶことを許すのである。

再びパリに出てきたピサロは、ちょうどパリ万国博覧会に遭遇し、数多くの絵画作品を見ている。この万博に会わせて建設された美術館には、計二十九カ国の芸術家二〇五四人による五〇〇〇点以上の作品が並び、そのなかでも、当代一の巨匠と評判の高かったアングル、ドラクロワなどは特別展示がされていたようである（「荒屋舗透、『サロンの危機』」、「こうして印象派は生まれた」(展覧会カタログ・一九九六年)、二二〇頁）。しかし、ピサロが関心を寄せた画家は、そうした巨匠ではなく、クールベ、コロー、ドービニーといった風景画家たちであった。なかでもコローとはその翌年に出会っており、多くの貴重

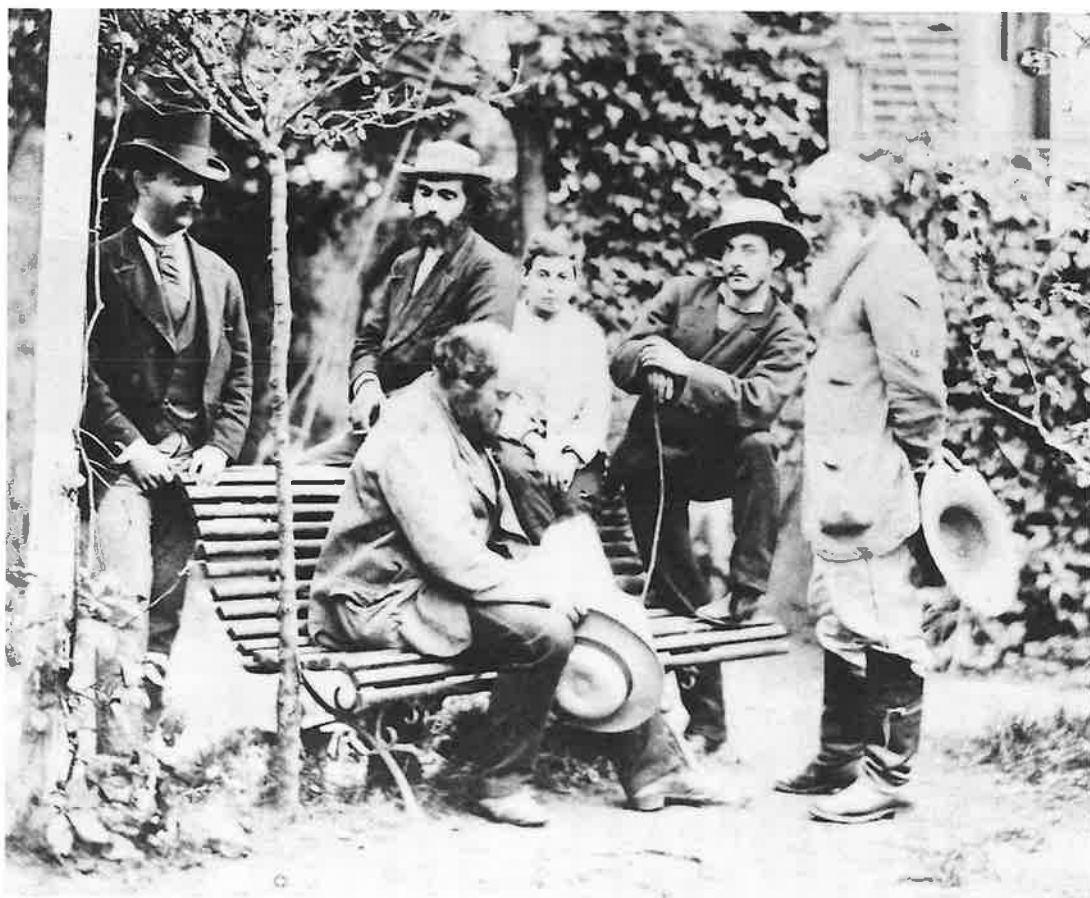
な助言を得ている。

一八五九年、サロンに初めて出品し入選する。この年以降、普仏戦争が起こるまでの経歴を概観してみると以下のようになる。六一年、セザンヌと出会う。六四年頃にはモネ、ルノワール、シスレーなどとも知り合い、共にフォンテーヌブローの森で制作をしているようである。この年のサロンに二点入選。六六年のサロンには、セザンヌとルノワールは落選するが、ピサロは一点入選、彼についての評論がゾラによって書かれる。六八年のサロンに二点の風景画が入選、賞賛を得る。六九年に、パリ近郊のルーヴシエンヌに移り住む。近くにはモネとルノワールが住んでいた。この頃、パリのバティニョール街にあったカフェ・ゲルボワで、毎週末曜日の夜に開催されていた集會に参加し、そこでマネやドガと定期的に会っている。ピサロは六〇年代を通じて、後に印象派と呼ばれる画家たちの多くと出会うっており、共に制作も行っている。そうしたなかで、しだいに作品の色彩も明るくなり、筆致も短くなつてきて、クールベ流のレアリスムやコロー風の自然賛美からも抜け出した新しいスタイルの絵画を描くようになっていくのである。

一八七〇年、普仏戦争の戦禍を避けるために、ピサロは妻子を連れてイギリスに渡った。イギリスでは、すでに逃れてきていたモネとともに美術館を巡り、コンスタブルやターナーの作品に感激している。このとき、すでに十年以上も連れ添っていた妻ジュリー・ヴェレーと正式に結婚する。パリにもどったのは一八七一年。ポントワーズに移り住んだのは翌一八七

二年。この頃ピサロを慕ってポントワーズに集まってきた画家のなかにセザンヌがいた。セザンヌは、それまでは鬱屈したロマン主義的な絵画を描いていたが、ピサロの影響もあつて外界の自然を素直に描写するようになる。また、ピサロもセザンヌの影響を少なからず受けているようである。

さて、サロンに出品するよりもむしろ自分たちの作品発表の場として、独自に展覧会を開催しようとする考えが仲間うちから出てきたのは、一八七三年頃のことである。この展覧会が結実するのは翌一八七四年であった。近代美術史上あまりにも有名な、いわゆる第一回印象派展である。しかし、嘲笑的に「印象派」と呼ばれる以前に自らが名乗っていたグループ名は「画家・彫刻家・版画家等の匿名芸術家協会」というきわめて即物的な名前だった。「協会」と訳されることが多いが、実際は「株式会社」と訳した方がこの団体の意味を正確に伝えているという指摘がなされている。それによると、出品作品が売れた場合、その売上金の一割をグループの基金に納めることや、一人年間六十分の供託金を支払うという取り決めがあり、一種の会社組織として考えられていたようである（深谷克典、「第一回印象派展とキャプシーヌ大通り」、「モネ展」(展覧会カタログ・一九九四年)、および浅野春男、「日の出の印象―芸術における理論と政治」、「こうして印象派は生まれた」(展覧会カタログ・一九九六年)参照)。この第一回展以降、印象派展は七回開催されることになる。その間、モネやルノワールがサロンに出品して印象派展を去っていくなかで、全八回



一番右にピサロ、ベンチに座っているのがセザンヌ:ポントワーズにて、1874年頃



左から妻ジュリー、五男ポーレミール、ピサロ、次女ジャンヌ:エラニーにて、1897年



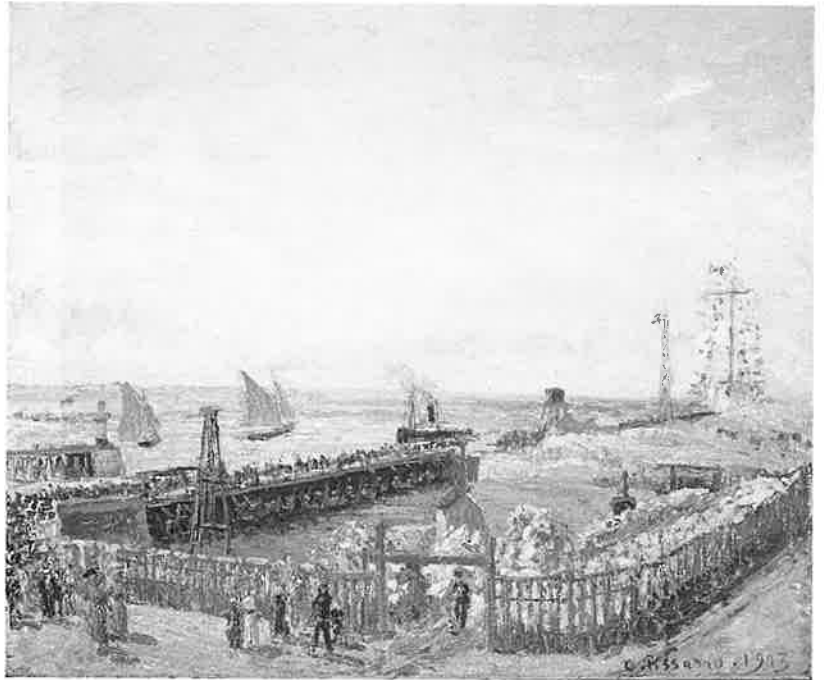
カミーユ・ピサロ 「田舎家と椰子の木のある熱帯地方の風景」 1856年



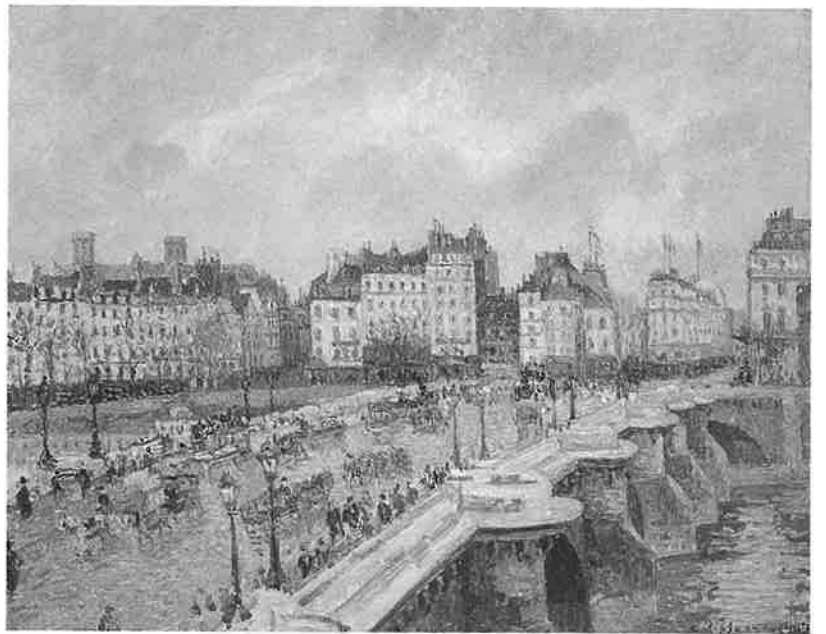
カミーユ・ピサロ 「エルミタージュの景色、ポントワーズ」 1867年



カミーユ・ピサロ 「藁の山と夕暮れのエラニー」 1893年



カミーユ・ピサロ 「ル・アーヴルの栈橋：満潮、朝の太陽」 1903年



カミーユ・ピサロ 「パリ、ボン・ヌフ」 1902年

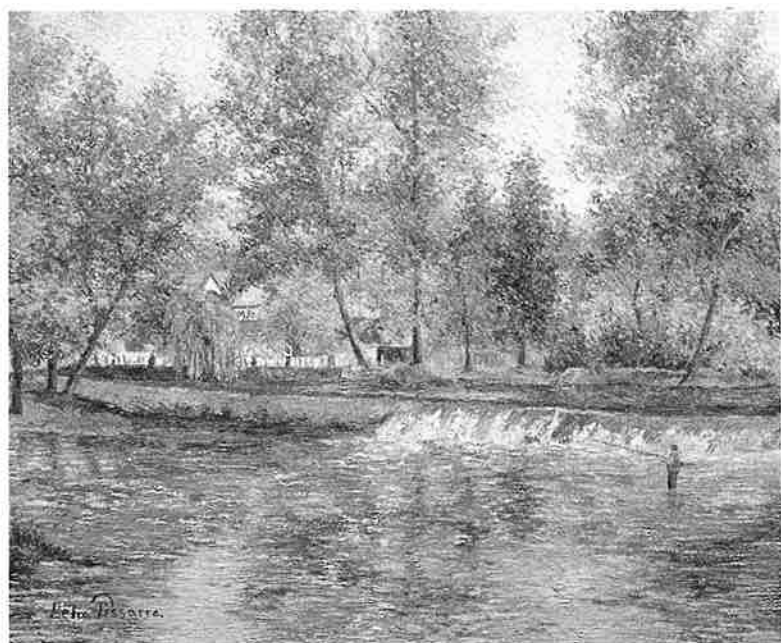
の印象派展すべてに出品したのはピサロただ一人であった。

一八八六年に開かれた最後の第八回印象派展には、ピサロはその頃接近していた新印象主義の技法による作品を出品している。多くの印象派の画家たちの目には、新印象主義は理論偏重の硬直した様式であるように映ったようだが、ピサロがこの新しい技法に取り組んだのにはそれなりの必然性があったようである。ジョン・リウオルドはこの頃ピサロが制作上の袋小路に入り込んでいたことを指摘している。かつて「ピサロは鮮やかな色で固苦しく描く。彼の画法によると春の花も陰鬱になり、空気は重くなる。彼の制作は青ざめて、不鮮明・不明朗である」とある批評家に言われたことを、ピサロは気にしていたらしい。そして、デュラン・リュエル画廊で、モネとルノワールの個展に続いてピサロの個展が開催されるという際にも、「私の作品は、このような輝きのある作品のあとでは、おとなしい、光沢のないものに見えるだろう」と手紙に書いていることが指摘されている（ジョン・リウオルド、「ピサロ」、平沢悦郎訳、美術出版社、三六頁）。こうした自分の絵画に欠如している明るさ・輝きを獲得するために、ピサロは自分よりも三十歳も若い画家のことに虚心に耳を傾けたのである。しかし厳格な分割筆致による制作は、戸外での自由な制作を不可能にしてしまうほど時間のかかる方法だった。数年の試行錯誤を通じて、結局ピサロは、新印象主義から離れていくことになる。

晩年のピサロは目を患い、制作が思うに任せなくなるが、最後の傑作ともいう



ルシアン・ピサロ(カミーユの長男)「オリーブの木、曇りトウロン」 1929年



レリア・ピサロ(カミーユの五男ポーレミールの孫)「ノルマンディのヴェイの風車」 制作年不明

べきルーアンやパリの都会シリーズに精力的に取り組むようになる。そして、ようやく経済的にも安定するようになった。ピサロの生涯を振り返ってみるならば、ここまでくるには、実に長く険しい道のりであったといわざるをえない。その間で、あまりの貧困ゆえに妻ジュリーが絶望のことは漏らしたこともあった。しかしピサロ家に育った五人の息子たちは、この長くつらい研鑽の日々が求められる画家という職業に迷うことなく進んでいく。晩年のセザンヌがなお「ピサロの弟子、ポール・セザンヌ」と署名したと伝えられるように、画家仲間から慕われた穏やかな長老格のピサロは、家庭においては、貧しくても家族を大切に、自分の信念をしっかりと息子に伝えることのできた父親であったのだろう。彼が生涯をかけて息子たちに伝えた信念は、その後三代にわたって受け継がれていくのである。

今回の展覧会は、ピサロの初期から晩年までの作品約六十点とともに、カミーユ・ピサロ以降三代にわたるピサロ家の画家八人の作品約四十点を展示する。

(斎藤郁夫 当館学芸員)

会期 八月一日～三十日(月曜休館)

午前九時～午後五時

(入館は午後四時三十分まで)

ただし八月六、七日は午後八時まで開館

(入館は午後七時三十分まで)

入場料 一般 一〇〇〇(八〇〇)円

学生 七〇〇(五〇〇)円

高校生以下無料

(一)は二十名以上の団体および前売料金

常設展示

周防国分寺の仏像

九月二十九日～十二月二十日

防府市にある周防国分寺（真言宗）は、奈良時代の聖武天皇による国分寺建立の詔勅によって全国に建てられた国分寺の内でも、今日まで大規模な伽藍をとどめている数少ない寺院である。昨年からは、まった金堂の修理にもなつて、十七体の仏像が当館に寄託されることになり、今秋常設展示室で公開することになったので、その仏像の概要を紹介する。

1 金銅毘盧舍那仏坐像

日本で智拳印を結ぶ如来形の仏像は、密教の本尊・大日如来で、冠や装身具をつけているが、朝鮮半島では毘盧舍那仏とよんで、装身具を付けない。また、土型で像の中心に鉄芯を用いる鑄造技法も朝鮮半島高麗時代の仏像に一般的なものである。

全体として丸みのあるずんぐりした体型に、高麗仏特有のかわいらしい面相が特徴である。このような様式的な特徴から、制作年代は高麗時代十三世紀後半と考えられる。本像は応永二十四（一四一七）年に焼失した五重塔内に安置されていたと伝えられているので、おそらく、朝鮮半島と交流の多かった大内氏の時代に渡来して、国分寺に奉納されたものと考えられる。

2 木造金剛界四仏坐像

高麗製の毘盧舍那仏とあわせて、五重塔内に金剛界五仏として安置されていたことが知られる。五仏は、金剛界曼荼羅の中心に位置する仏たちで、大日如来を中心に四方に四仏を配して五仏としたものである。通常四仏の中には、薬師如来が含まれないが、国分寺の本尊が薬師であり、薬師が東方の浄土に住むとされることから薬師が含まれるのであろう。

これらの四仏は、高麗時代の毘盧舍那仏（大日如来）とは違い、寄木造漆箔で玉

2 薬師如来

像高五一・〇



3 不空成就如来

像高五一・五



4 宝生如来

像高五一・〇



5 阿弥陀如来

像高五一・〇



眼をいれる日本製で、一見してその違いがわかる。全体が角張って箱を積み上げたようなプロポーションで、四角張つてのつぺりした面相やうねるような衣のしわの表現が特徴で、室町時代に京都で活躍した院派系仏師の作と考えられる。

この像の作風や、応永二十四年まで五重塔の内部に安置されていたという伝承から、一四一七年前に、高麗製の毘盧舍那仏にあわせて四仏を作り、五仏として五重塔に安置したとみるのが妥当と思われる。

1

毘盧舍那仏（大日如来）

像高五一・六（センチ）





9 日天
像高七三・三



8 梵天
像高七五・五



7 伊舎那天
像高六八・〇



6 帝釈天
像高七三・〇



13 火天
像高六七・〇



12 焰摩天
像高七〇・五



11 羅刹天
像高七四・〇



10 水天
像高七五・〇



17 風天
像高六八・五



16 毘沙門天
像高七三・〇



15 地天
像高七六・〇



14 月天
像高七五・三

6 17 木造十二天立像

十二天は、守護神として八方位、天地、日月をつかさどる十二の神々で、インド古来の神々が密教に取り入れられたものである。密教の十二天は、十二の諸神が本来持っていた働きや機能を担いつつ十二天として集まっており、如来の四方を守護する頭教の四天王よりも重要な役割を担っている。密教の修法の際には、この十二天の画像を道場に掛けて、修法を妨げる悪神の侵入を妨げるのに用いる。また、十二天は、曼荼羅の周辺区画である外院に配されることも多い。県内の作例では、長門国分寺(下関市)の絹本着色十二天曼荼羅が有名である。

十二天の像容は、經典によって若干の違いがあり一定ではないが、日本では東寺の十二天図屏風がよく知られている。十二天像は、四天王像と違い寺院の礼拝像としてではなく、密教の儀礼に用いるもののため、画像は多く造られたが、彫刻の作例は数少なく、愛知・無量寺の室町時代の作例が知られる程度であり、全国的に見ても希有な作例である。

国分寺の十二天は、寄木造で玉眼をいれた彩色像である。制作年代については定かではないが、昨年金堂の本尊体内から発見された仏像手首の箱書にこの十二天のことが記されており、遅くともこの箱書の書かれた元禄十二(一六九九)年以前には、国分寺護摩堂にあったことがわかり、制作年代は、それ以前ということになる。様式的には江戸時代の雰囲気強いが、それよりさかのぼる可能性もある。

(岩井共二 当館学芸員)

山口県美術展覧会ボランティアのこと

「おー、これはいいじゃないか」

「河野さん、まじめに考えてます?」

「あたりまえだよ。なんでわざわざそんなこと聞くの?」

「だってこの原稿、河野さんに一回目にみてもらった時に、ボツにされたやつなんですけど」

「うそーじゃ、だめ」

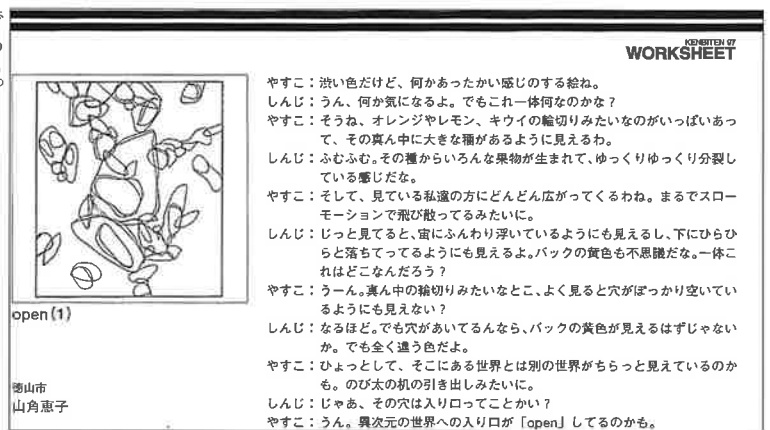
「えーっ」

「つていつてもだめ」

「・・・」

ボランティア・スタッフにこんな醜態をさらしながらも、一緒にワークシート（作品解説のようなもの、下図）をつくっていく。といつても、私は印刷物になる前のスタッフたちの原稿を批評し、「こういう難しい解説じゃお客さんは文章読むだけで疲れちゃうよ、作品見られないじゃないか、バカたれ」などと罵倒したうえで、ダメだしをするだけである。文章はもちろんのこと、イラスト、レイアウトデザイン等すべて彼らの手だけで作りあげられ、ひととおりでそろったところまでとめて印刷会社に渡す、私が。

例としてお見せしているワークシートは、昨年度の第五十一回山口県美術展覧会（以下、県美展）のもので、入選作品の一つ、『open (1)』（山角恵子さん作）に肩入れしたスタッフの一人が作り上げたものだ。作品イラスト入りのこういったものがスタッフ一人一人によって十数点つくられ、会場内作品横に設置された透明の亚克力ボックスの中に置かれるわけ



ボランティアによって制作されたワークシートの一例(1997年度第51回県美展から)

方にはこんなたぐいのものもあるんだというところを見せる役者である。と同時に、たとえばみずからつくったワークシートを会場に置くことによって、かくかくしかじかの見方をしていく「観客」を演じてみせてもいるのである。

県美展ワークシートとは、まさに作品解説のようなものと書いたが、決して作者の意図を伝えるための補助器具などではなく、作品をどうやって見たかということを観客に伝えるための表現形態のひとつなのだ。

とはいっても、舞台の主役はあくまで作品なのであって目立ってはいけいない。自分の考えや知識をだたらと垂れ流す体の脇役など、観客からしてみれば鬱陶しいだけなのだから（まあその点では主役でも同じですが）。

そういうわけで、この役に与えられた規制はきわめて多い。長々と説明してはいけいないし、自分の美術史的知識を羅列する必要もない。また、作品を際立たせるためにこそ観客に語りかけるのだから、決して説き伏せてはいけいない等々。要するに、観客は歩きながら実際に作品を見ているのだから、そのじゃまをしないということである。

「改革」されたといったって、大して変わっていないんじゃないか。会場をぱっと見渡してそう感じた人も多いだろう。作品が変わるといって、毎年応募作品が違うのだから当たり前のことだし。

しかし、このさりげなく控えめなワークシートにこそ「改革」の目玉が潜んでいる。なんといつても、改革県美展の趣旨とは、つくること、みること、ささえること

といった、美術とかわるいろいろな立場が密接に絡み合っているような土壌を山口に創り上げていくということなのだから。

ワークシートをみて、「なるほどこういう反応があるのか」と作者に手応えを感じてもらいたい。「こういう見方もあるのか、しかし、私はこうみる」というような会話が観客の間で生まれていくこと。また、そうした気楽なおしゃべりを、しかしじっくりと見なければ決して生まれることのない会話を通じて鋭い批評眼が育まれていくこと。その鋭い批評が作者に再びかえされていくこと。そして、そのような緊張した関係性を作り上げていく人材をも増やしていくこと。

そう簡単にこんな理想的循環が生まれてくるとはもちろん思わないけれども、それは始まったばかりなのである。

今年もまた、県美展開会を二ヶ月後に控えてボランティアの第一回説明会が開かれた。まずは、ポスターのデザイン、そして、第五十二回県美展のキャッチコピーを決めていく。そして、長い長いワークシート作成練習が始まる。

あんな規制を受けて果たして自分でワークシートが書けるのかしらんと思いつつも、そして実際に書くことに試みていまだに書けたためしがないにもかかわらず、その当の学芸員自身が鍛え上げていくうちにいつの間にかボランティアの方は書けるようになってくる。「ふふん、学芸員は書けないじゃないか」。

冒頭の造反劇はまたもや引き起こされるのだろうか。

（河野通孝 当館専門研究員）

第五十二回山口県美術展覧会 開催要項(抄)

1 趣旨

制作の創造性を高めると同時に、鑑賞することや美術文化をささえていくことの創造性をも育成することのできる、総合的な美術文化の普及と振興をはかる。

一 自由な意識や現代社会に根ざした作品を広く募集し、その優秀なものを展示する。

二 ワークショップを開催し、さまざまな鑑賞体験の場を提供する。

三 展覧会全体を運営していくボランティア・スタッフを募集し、芸術を支援していく場を提供する。

2 会期および会場

会期 九月十七日(木)～十月四日(日)

(月曜休館)

会場 山口県立美術館

3 観覧料

一般 二五〇(二〇〇)円

学生 二〇〇(一五〇)円 高校生以下無料
(一 内は二十人以上の団体料金)

【作品公募】

4 審査員(五十音順)(予定)

石川九楊 一九四五年生まれ。現在、東京学芸大学・京都精華大学講師。独創的な書を発表する書家として活躍。近年は「書は書く芸術である」という独自の「筆触論」をもとに様々な評論活動をも展開。

建畠 哲 一九四七年生まれ。国立国際美術館主任研究官を経て、現在多摩美術大

学教授。多数の展覧会を企画すると同時に美術評論家としても活躍。散文詩に新境地を開いた詩人としても知られる。

西村智弘 一九六三年生まれ。美術手帖第十一回芸術評論募集(一九九二年)にて

「ウォーホル―映画のミニマリズム」が入選佳作を受賞。以降、同誌の展評を担当するなど、美術評論家として活躍。

5 出品規格

保管・展示の可能なものであれば、形式・寸法・重量・材質等は問いません。額装の場合、原則としてガラスは不可、アクリルは可。保管・展示に問題があるもの(例:組作品、3m²相当以上の寸法のもの、500kg以上の重量のもの、もろい材質のもの、ビデオ作品については機器等)あるいは特定の展示場所を希望する場合は、事前に事務局との協議が必要です。(事前協議受付期間は七月二十日午前九時から八月二十日午後五時までとします。ただし、特定の展示場所がなくなる場合もありますので、早めにお願ひします。)

6 応募にあたっての留意点

一 応募作品は、自己の創作した未発表作品であること。また応募点数に制限はありません。

二 出品作品には、所定の出品票を裏面右上にはりつけること。

三 所定の用紙に作品制作の狙いやコメントおよび書釈文等を記入し、出品作品とともに提出のこと。(なお、ボランティアによるワークシート作成のために参考とするもので、審査には一切関係ありませんので、必ずしも提出する必要はありません)

7 出品料

一点につき二〇〇〇円を出品目録に添えて納入すること。納入された出品料の返却には応じられません。

8 作品の搬入

一 搬入日時 九月四日(金)～六日(日)
午前九時～午後四時(正午～午後一時までは受け付けません)

二 受付場所 山口県立美術館(山口市役所側通用門から搬入のこと)

9 作品の搬出

一 搬出日時 十月九日(金)～十一日(日)
午前九時～午後四時(正午～午後一時までは受け付けません)

二 受付場所 山口県立美術館

三 搬出は、作品預かり証と引き替えに行います。

四 搬出期限後の作品は処分します。

五 不慮の災害による作品の汚染・亡失等については、責任を負いません。

10 搬入の費用

出品者の負担とし、返送希望の場合は荷造り運賃着払いとします。

11 審査会

一 審査会場 山口県立美術館

二 審査会日時

九月八日(火)午前十時～午後五時
九月九日(水)午前九時～正午

三 審査は公開します。傍聴希望者は、九月八日(火)午前九時五十分までに必ず美術館正面玄関に集合すること。定刻に集合できない場合は、あらかじめ往復ハガキに住所・氏名・電話番号を明記のうえ、事務局まで申し込むこと(締切八月三十一日・当日消印有効)。途中からの傍聴は原則として認めません。

四 審査会二日目には、審査員に審査会全般に関して論じていただいた後、審査会参加者による質疑応答の時間をもちます。

12 審査発表

新聞、テレビ、ラジオ等で発表するとともに、入選者あてに通知します。

13 賞

大賞 一名 (賞状・賞金五十万円・次年度展示空間とそのための制作費五十万円)

優秀賞 五名 (賞状・賞金五万円)

佳作賞 (賞状)

14 特別展示

昨年度準大賞受賞者松尾宗慶(一九六五年生まれ、山口市)氏の新作を特別展示。

15 シンポジウム

一本展の受賞者および運営委員をパネリストとして、山口県美術展覧会のありかたを考えるシンポジウムを開きます。参加料は無料です。

二 会場 美術館講座室

三日時 九月二十七日(日)午後一時～四時

【ワークショップ開催】

16 ワークショップ

一 「みる」ことの多様なあり方を様々なプログラムを通じて体験していただき、作品をただ受動的に鑑賞するだけではなく、「みる」こともまた美術における重要な表現方法のひとつであるという意識の育成を目的とします。

二 今年度は、新進気鋭の写真家

野村佐紀子(一九六七年生まれ、山口県出身、写真集「裸の時間」等)氏を招いて、会場内の一角に作品を展示すると

ともに、インタビューや撮影現場あるいはアトリエ風景などによって構成されたスライド・ショーを行います。

【ボランティア募集】

17 ボランティア

一 作品公募やワークショップ開催にともなう様々な業務への県民のスタッフ参加を募り美術館活動に対する理解を深める場を設けるとともに、普及活動の新しい形態を模索する場を設けることを通じて美術文化との多様な関わり方を創出していくことを目的とします。

二 スタッフ業務

展覧会広報活動・普及教育活動補助(出品目録やワークシートの作成、会場解説等)・ワークショップ補助など

【主催 運営委員会・事務局】

18 主催 山口県・山口県教育委員会

19 第五十二回山口県美術展覧会運営委員

荒瀬景敏(美術作家)

木本信昭(下関市教育委員会)

武田雅行(美術作家・山口芸術短期大学)

外山紀久子(山口大学)

原田文明(美術作家)

福田隆真(山口大学)

前田哲男(山口県立大学)

水谷由美子(山口県立大学)

三輪和彦(美術作家)

森川絃一郎(徳山市美術博物館)

吉光純也(美術作家・山口大学)

貞弘勉(山口県教育委員会)

竹下隆信(山口県)

20 事務局 山口県立美術館

美術館から

これからの特別展

ピサロ展

―印象派の巨匠とピサロ家の画家たち―

八月一日～八月三十日

第五十二回山口県美術展覧会

九月十七日～十月四日

ナン・ゴールディン展

十月十六日～十一月二十九日

(於第二常設展示室)

禅寺の絵師たち―明兆・靈彩・赤脚千―

十月二十三日～十一月二十三日

第五十一回山口県学校美術展覧会

十二月十日～十二月十三日

山口県立大学卒業制作展

二月四日～二月七日

山口大学卒業制作展

二月十一日～二月十四日

山口芸術短期大学卒業制作展

二月十八日～二月二十一日

これからの常設展

第一常設展示室

●絵画展示室(香月泰男室)

シベリア・シリーズ(2)

七月二十八日～九月二十七日

シベリア・シリーズ(3)

九月二十九日～十二月二十日

シベリア・シリーズ(4)

十二月二十二日～

●絵画展示室(小林和作室)

戦後の日本画

六月三十日～九月二十七日

周防国分寺の仏像

九月二十九日～十二月二十日

小林和作展

十二月二十二日～

●郷土工芸室

古萩展

六月三十日～九月二十七日

現代の萩焼

九月二十九日～十二月二十日

植木茂展

十二月二十二日～

●資料展示室

トーマス・シュトルートの写真

七月二十八日～九月二十七日

周防国分寺の仏像

九月二十九日～十二月二十日

アンセル・アダムズの写真

十二月二十二日～二月二十一日

ウイン・バロックの写真

二月二十三日～

第二常設展示室

ベアト・ストロイリ展

十二月四日～一月十七日

新収蔵の現代美術

一月二十六日～

雲谷派展

一月二十六日～二月二十一日

松林桂月展

二月二十三日～

■料金

◎特別展

別途に定めた料金

◎常設展

一般 一九〇(二六〇)円

学生 一二〇(一〇〇)円

高校生以下は無料

(一) 内は二十名以上の団体割引料金

■開館時間

午前九時～午後五時

(入館は午後四時三十分まで)

■休館日

月曜日(月曜日が祝日もしくは振替休日の場合は翌日休館)と年末年始(十二月二十八日～一月三日)

■美術館案内

NTTハローダイヤル(〇八三九・二二・三八六〇〇)をご利用ください。

山口県立美術館ニュース

「天花」

第七十四号

平成十年八月一日発行

発行 山口県立美術館

〒753-0089 山口市亀山町三・一

TEL 〇八三九・二五・七七七八

FAX 〇八三九・二五・七七九〇

印刷 刷瞬報社写真印刷株式会社